

保育実態史から見た日本におけるキリスト教保育思想の展開 -
立花富、南信子及びアイリン・ライザーの活動を中心に -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-25 キーワード: 作成者: 熊田, 凡子, KUMATA, Namiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00061490

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

保育実態史から見た日本におけるキリスト教保育思想の展開—立花富、南信子及び
アイリン・ライザーの活動を中心に—

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Development of Christian Early Childhood Education Thoughts in Japan from
the View of Actual Early Childhood Education History: With a Focus on the
Activities of Tomi Tachibana, Nobuko Minami, and Anna Irene Reiser

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 熊田 凡子

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 志村 恵

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Abstract

The aim of this paper is to clarify the development of the Christian early childhood education thought in Japan from its origin. In this paper, primary historical resources developed by Nobuko Minami (a leading Japanese Christian early educator), Tomi Tachibana (Minami's teacher and mentor), and female Christian missionaries (especially Anna Irene Reiser, who interacted with these women) were used. Their perspectives on education and children, as reflected in these primary documents, were analyzed based on the actual practices of Christian education. This paper thereby is to clarify the development of Christian early childhood education thought in Japan. A further aim is to contribute to historical research on education for children in Japan by analyzing the effects of Christian early childhood education practices on Japanese early education. The value of various other historical documents is also emphasized; these include kindergarten memorial books, nursery journals, letters to parents, and annual reports written by Tachibana, Minami, and Reiser.

Early childhood education in Japan had its beginning in the "American Mission Home," with female missionaries have continued to carry Christianity kindergartens. Thereafter, Japanese women such as Tomi Tachibana and Nobuko Minami, who were Japanese kindergarten teachers taught by Christian missionaries, continued the educational philosophy of female missionaries in their own Christian early childhood education practices.

Christian early childhood education in Japan, as practiced by female missionaries and Japanese kindergarten teachers, retained its essential views on education and children over a long period of modern Japanese history. These thoughts were retained from the dawn of early childhood education in the Meiji period to the Taisho period, and then through the Showa period, with its three historical phases: pre-war, wartime, and postwar. During the Pacific War, their views of education and views of children were seen where was essentially unchanged despite the external changes made in response to Japan's wartime regime. Christian early childhood education thoughts, which consistently respect each child as a personality and cherish the mind of each child, has had a strong influence on early childhood education in Japan.

1. 本博士論文の課題と方法

本博士論文は、日本におけるキリスト教保育思想の展開を、その源流から通史的に明らかにすることを目的とする。すなわち、筆者（熊田）の修士論文「南信子の保育思想の形成および保育実践・理論の展開－戦前・戦後の歩みから－」をさらに大きく展開するものとして、主に、日本を代表とするキリスト教保育者であった南信子や南の恩師の立花富、あるいは彼女たちと交流のあった女性宣教師たち（特にアイリン・ライザー）が残した一次史料を基に、彼女たちのキリスト教幼児教育の実態から見える教育観や子ども観を分析しつつ、日本におけるキリスト教保育思想の展開を明らかにすることを課題とする。なぜなら、これまでキリスト教保育の幼児教育観や

子ども観については、保育の実践を示した一次史料を利用した研究が極めて少なく、また日本における幼児教育研究においては、女性宣教師の思想及びその役割についての考察が極めて不十分であったためである。

同時に、これらのキリスト教幼児教育においてなされた実践が、日本の幼児教育にいかなる影響を与えたのかを明らかにすることで、日本の幼児教育史研究全体に資することを目的とする。さらに、立花、南、ライザーたちが残してきた幼稚園記念帖や保育日誌、保護者宛の便り、年次報告書等の史料的価値についても検討するものである。

2. 本博士論文の構成と内容

本博士論文は、序章「研究の課題と方法」、第1章明治期「日本の幼児教育の源流におけるキリスト教教育の役割」、第2章大正期「女性宣教師のキリスト教教育観」、第3章昭和戦前期「キリスト教主義幼稚園における自由教育の発展」、第4章戦時下「南信子と立花富を巡るキリスト教幼児教育観・子ども観」、第5章戦後初期「戦後の新教育とキリスト教保育の関連性」、及び第6章（1章補章として）「北陸地域に女性宣教師の果たした役割」、結章「キリスト教保育思想の展開と現代的意義」からなる構成で、各章では、それぞれ設定した課題のもとで、キリスト教幼児教育の実態から見るキリスト教教育観及び子ども観の考察を試みる。

2-1. 第1章 日本の幼児教育の源流におけるキリスト教教育の役割

第1章では、日本における幼児教育の源流と女性宣教師の働きの関係について、実証的に取り上げて検討する。日本の幼児教育の起源は、女性宣教師の宗教的・教育的営みによって支えられていたことが確認できる。特に、子どもの存在を重んじ、自らを母とし大事に幼児を育てるキリスト教教育の姿勢は、「アメリカン・ミッション・ホーム」(1871年)の女性宣教師プライン、ピアソン、クロズビーらによる欧亜混血児の養育・教育からの影響が大きいと言える。それは、官立幼稚園及びキリスト教主義幼稚園のいずれにも共通していたことである。

つまり、「アメリカン・ミッション・ホーム」は日本の幼児教育の先駆けであり、中村正直、関信三、近藤はま、桜井ちかといった日本人教育者たちが影響を受けたということ、また、彼女らの働きに続きジュリア・カロザース、マリア・ツルーらも女子教育・幼児教育を展開し、日本人女性の中から、保育の道に進む者が多く育っていったことに言及した。ホームから始まり発展してきた女子教育・幼児教育は、子どもとの関わりを通じて、プラインの「女性の尊厳と自立を認める」、ツルーの「気高い成人女性になる」ということなどを目的にした、キリスト教教育であったと考えられる。また、フランシナ・ポーターが創設した日本最古(現存)のキリスト教主義幼稚園では、子どもの自由な表現や考え等が受け入れられ、キリスト教精神を基盤に地域に根ざした幼児教育が実践されていた。

2-2. 女性宣教師のキリスト教教育観

第2章では、キリスト教保育の草創期から発展期の中心にあった、ランバス女学院附属幼稚園のキリスト教保育の理念と実践について、女性宣教師クックが先駆的に導入し展開していた、アメリカの進歩主義の幼児教育の理念や方法から、実践史的に確認する。また一方、同時期に、北陸の英和幼稚園園長としてキリスト教保育に携った女性宣教師アイリン・ライザーの教育実態、

またその役割について、ライザーが記録した一次史料を基にした当時の幼児教育の実態に触れ考察する。

ランバス女学院附属幼稚園のクックの保育は、広島時代からランバス時代を繋いだゲーンズ、甲賀ふじ、マコーレ、クック、フルトン、マクドウェル、ピービーら女性宣教師たちの「飽食児童中心主義」の視点が素地となり、「遊び」に基づく、子どもの興味、知識欲、活動欲が発達する、すなわち、子どもの内面を受け止めて遊びが展開していく試みであり、日本の保育界においても自由保育の先駆的な取り組みであった。

また、アイリン・ライザーの大正・昭和初期の教育活動は、子どもや女子生徒の1人1人と丁寧に向き合う姿勢が基本にあった。それは、子どもと女子生徒の動作やその背景まで詳細に受け止めていたことが読み取れる彼女の記録から分析できる

つまり、ランバス女学院附属幼稚園のM.クック、北陸地域の英和幼稚園園長としてキリスト教保育に携った米国長老教会女性宣教師アイリン・ライザーのいずれの教育活動も内面的な育ちや関わりを大事にするものであったと言えるのである。

2-3. キリスト教主義幼稚園における自由教育の発展

第3章では、ランバス女学院附属幼稚園におけるクックやピービーの教育理念がどのように実践されていったのか、立花富の記録に基づいて立花の自由教育観や子ども観を分析し、自由保育の成立過程を実証する。1928（昭和3）年から、立花は次の事を「ランバス幼稚園の近況」および、「ランバス幼稚園記念帖」等の記録に残している。

第一に、立花の自由教育は、教師の計画に方向付けるのではなく、子ども自らの要求を示すことが基礎にある、教師と子どもが学び合う営みであったということである。立花は、子どもたちが教師に一分の隙も与えないほど意欲的で自発的であると捉え、子どもの作業の動機、進行、過程、結果等をよく観察し、子どもの興味の深さを強く認識していたのである。

第二に、自由作業や自由遊びの中では、子ども自らが思いや考えを表現することができた。それは、立花富が子どもの発想や製作品の背景まで記録に残すほど、1人1人の内面を大事に尊重し受け止めていたことによるものである。

第三に、子ども自らがよく考え、吟味し、決めるという認識を持ち、子ども社会の中で自主的に創造的な遊びを連続させていた。立花は、よく考え行動する子どもたちを「自治」と捉え、子どもの育とうとする大なる力、可能性を高く評価していたということである。

第四に、子どもたちは、聖句や讃美歌を単に覚えるのではなく、自らの経験や感覚を通して、神に目を向けていた。キリスト教教育の中でも、子どもらが生み出す会話や遊びは創造的で想像的であった。

そのように自発的に内側から動いて出てくるものを大事にするキリスト教教育の姿勢が記録されていた。立花は子どもが抱く世界観を理解し、自ら感得する子どものイメージに共感し、これを尊重していた。立花が進歩主義教育の考えを基に展開させたキリスト教教育、これが立花の自由教育であった。

つまり、こうした立花富の教育実践は、デューイの経験主義の基にクックが幼児教育の実際として意図し表現したものであり、自由教育そのものであった。ランバス女学院附属幼稚園では、子どもの経験による創造が展開されていたのである。第3章で取り上げた日本人教育者立花富の

自由保育の実践過程は、日本の進歩主義教育実践の先駆的事例であり、歴史的事実として明記できる。そうした貴重な実態を読み取ることができる一次史料が残されていたのである。

2-4. 南信子と立花富を巡るキリスト教幼児教育観・子ども観

第4章は、戦時下における南信子と立花富のキリスト教幼児教育の実践における、思想の展開に着目する。戦時下における南信子と立花富を巡るキリスト教幼児教育の実態を、一次史料『第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園』(1942年度)と『1943年度聖和幼稚園第二回修了記念帖』、聖和幼稚園の「保育の記録」(1943年度)と「保護者宛ての通知」(1942年度-1948年度)等を中心に紐解き、それらに描かれた戦時下のキリスト教幼稚園での生活や遊びの内容を明らかにする。

まず、南信子の「鶴町幼稚園」での実践では、子どもが主体的に活動する自由作業、また日々の生活経験に結びつく対話、さらにリズムやごっこ遊び・劇等を通じた、想像的で創造的な楽しい遊びが繰り返されていた。しかし、遊びの内容には、戦争ごっこや兵隊を真似た身振りなど、戦争の背景がそのまま反映されていた。それでも、南は、子ども1人1人の内側が動き出す素直な心を尊重し、特に子どもと祈る時を大事にしていた。それが南の自由な教育であった。そうした点が、子どもの様子を中心とした南の記録に残されていた。

また、その後の聖和幼稚園における南信子と立花富による実践でも、子どもの1人1人の生命を大事にし、子どもが抱く思いや行動に共感し、そのことを『お便り』を通じて保護者らと共有していた。戦時体制に対応せざるを得なかった中でも、1人1人のエピソードを詳細に述べていることは、子どもの内面や保姆らの子どもを見る目を大事にしていたことを表している。立花富・南信子らが継続してきた自由教育の展開は、第4章で扱った研究史料が如実に物語っていた。ただし、戦時中の子どもらは戦時社会を自然に吸収し、ありのままに表現していたが、南と立花は、そうしたことをもキリスト教幼児教育として受け止め認識していたのかどうかという点は今後の課題となった。

さらに、こうした戦時下における幼児教育界についても、キリスト教保育連盟の動向を踏まえ言及した。当時の基督教保育連盟は「昭和一七年三月七日付」通達を出していた。その通達は、いかにも国民学校に準じた規則のように示されたものであり、キリスト教主義幼稚園は、その通達に従っていたと考えられる。ただし、戦時下における幼児教育界では、社会的影響はあったが、国家主義体制からの直接的要請はなかった。ところが、敢えて行政官庁の意向に添った指示を強調したという点は、当時の基督教保育連盟理事長矢野貫城が、明治学院長かつ基督教教育同盟会理事長としてキリスト教学校に対して示した方針と同様のことを幼児教育においても実施したことであったと指摘できる。

第4章で、取り扱った一次史料は、これまで明らかにされていなかった戦時下におけるキリスト教幼児教育の実態や、キリスト教学校史等で単に伝記的に述べられてきた事項を改めて実証し、より詳細に見ることができるものである。特にそこには、ランバス女学院附属幼稚園の自由教育がキリスト教保育として継続的に実践されてきたこと、戦時中の体制による変異があったとしてもそれは表面的な変化であり、本質的な考えは変わらなかったというキリスト教保育の本質の一貫性を示す重要な史料が含まれていたと言える。

2-5. 戦後の新教育とキリスト教保育の関連性

第5章では、南信子の残した記録を中心に分析し、戦時下から戦後に継続してきた聖和幼稚園でのキリスト教幼児教育の実態を明らかにする。また、東洋英和幼稚園の教育観・子ども観の一貫性についても取り上げ、南の教育実践の戦後の新教育「保育要領」への影響について、戦後の「保育要領」刊行に至る展開から検討する。さらに、アイリン・ライザーが、戦後のキリスト教学校に果たした役割について、金沢における北陸学院保育短期大学を事例に明らかにする。

南信子の記録「保育日誌」は、子どもの思いや考えがどのように表情や行動となって表れるのかを捉えていた。つまり、南は、子どもの意思による経験の連続性を重視し、子どもの成長を記録していたのである。記録には、子どもが自分の思いや考えを自覚し、自分の内なる声を表現した対話が残されていた。こうした点には、ランバス時代の教育思想、子どもの1人1人の個性を尊重し、自立性、社会性、創造性を養うためのあらゆる機会を把握し身近な生活から具体的に教育する南の姿勢が表れており、これは一貫して継続してきたものである。

また、東洋英和幼稚園では、福島寿美江から高橋千恵子に受け継がれた保育実践や、特に戦時中高橋が功刀嘉子の指導の下、キリスト教幼児教育の本質的な視点を再認識していたことなどを「保育日誌」に記録していた。それは、形式的な見栄えや出来栄ではなく、美しさを感じる感性や、楽しさや喜びを分かち合う心の内側を大事にすること、子どもの1人1人の育ちを尊重すること、つまり子どもの豊かな心を大事にすることであった。そうした実践が戦後へと継続されていたことを示しているのである。

他方、ライザーは、戦前からの子どもや女学生、庶民の人々1人1人を大事に受け止める姿勢を持ち続け、記録に残していた。彼女は、戦後すぐにアメリカから金沢に戻り、戦中戦後の金沢の状態を受け止め、米国教会に資金援助を促し、日本人指導者を育成させるなど、キリスト教保育者養成課程の土台を創った。こうしたライザーの戦前期から一貫した宣教に対する姿勢が、戦後の北陸におけるキリスト教教育の復興を後押ししたのである。

このように、戦後の聖和幼稚園の実態に見る南信子、及び戦時下から戦後にかけての東洋英和幼稚園の教師らの保育の捉え方や子どもを見る視点、戦後のライザー宣教師の宣教教育活動の姿勢は、いずれも、戦前・戦時下・戦後へと連続し一貫していたことが一次史料より読み取れる。特に、昭和戦前・戦時下から戦後へと連続してきた聖和幼稚園でのキリスト教幼児教育の実践は、子どもの主体的な戦後の新教育「保育要領」に示した教育を先取りして既に実践していた教育として評価されるべきもので、「保育要領」刊行を促す役割をも果たした可能性がある。そして、そのことに功刀嘉子が深く関与していたことが指摘できる。

こうしたキリスト教幼児教育の連続性の意味を示す一次史料を南信子をはじめとする、キリスト教保育者らが書き残していたのである。

2-6. 北陸地域に女性宣教師の果たした役割

第6章は、第1章を補足するものとして、明治期から大正・昭和初期にかけて、北陸地方における米国長老教会女性宣教師やカナダ・メソジスト女性宣教師等、主にアメリカ・プロタスタント系の女性たちによる教育及び宣教活動の一実態を明らかにするとともに、北陸地域に女性宣教師の果たした役割について考察する。

第一に、「金沢女学校」「英和幼稚園」の女子教育と幼児教育の営みが、北陸地域にキリスト教

として受容され、その後も女性宣教師によってキリスト教教育が続いていた。

第二に、「英和幼稚園」の幼児教育が素地となり、教派を超えたアメリカプロテスタント女性宣教師等が幾つもの幼児教育施設を運営・発展させたことによって、キリスト教幼稚園が北陸地域に認められ、仏教派幼稚園の設立・推進にも影響を与えたことである。つまり、キリスト教幼稚園が、北陸地域に幼児教育の意義を示していたのである。

第三に、超教派の女性宣教師たちは、保姆養成を含めたキリスト教幼児教育の実践と研究を束ねるネットワークを形成し、それが、北陸地域におけるキリスト教宣教として向上していったのである。

すなわち、女性宣教師たちが果たした幼稚園教育そのものが伝道活動であり、北陸地域において教育的・社会的活動として受容され、根付いていった。こうしたことが読み取れる内容を女性宣教師らは、記録し残していた。

2-7. まとめ

以上のように、日本の幼児教育においては、「アメリカン・ミッション・ホーム」に始まり、女性宣教師らによってキリスト教主義幼稚園の営みが継続されてきた。その後は、宣教師らから学んだ日本人保育者（本論文では立花富や南信子らを取り上げる）たちがキリスト教幼児教育の実践を通じて、女性宣教師らの教育理念を連続させてきたのである。幼児教育の黎明期である明治期から大正、昭和（戦前、戦中、戦後）に亘り、子どもを主体的に見る女性宣教師や日本人保育者の教育観・子ども観は、一時期戦時体制に迎合する外面的な変化が見られたとしても本質的には変わらなかった。一貫して子ども1人1人を人格として尊重し、子どもの内面を受け止めてきたキリスト教保育思想は、日本の幼児教育に強く影響を及ぼしてきたのである。

3. 巻末資料データベースについて

巻末に提示したデータベースは、筆者が、修士論文以後、南信子の一次史料を調査及び発掘し、本博士論文の分析に使用した一次史料に関する、主に関西学院聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵の史料群である。アイリン・ライザーの史料は、米国長老教会歴史協会所蔵のライザー宣教師個人ファイルの内容をデータベースにしたものである。

本論文では、その中身を解き明かし、通史的にキリスト教保育の思想展開を物語る資料として扱ってきた。いずれも、キリスト教保育の歴史を物語る一資料であるとともに、日本における幼児教育界との関係や影響について窺うことができる非常に貴重な史料であることが分かった。また、扱った史料のデータベースから得られた知見には学校史等を補う内容のものも含まれていた。こうした点を整理し、歴史的遺産としてだけではなく、データベースとして活用できるようにすることが必要であろう。

4. 博士論文の今後の課題

今後残された課題としては、第一に、戦時下に行ってきた国民儀礼等の戦時体制下に準じた教育を南信子らがどう省察したのか、という点である。第二に、キリスト教の精神を基盤にした幼児教育を行う中、特に戦時下では、子どもたちに対して、キリスト教の神を天皇や神道の神として示していたのか、ということを確認にできていない点である。第三に、立花富の自由教育（進

歩主義教育)の先駆的役割が、同時期、あるいはその後の官立及びキリスト教幼稚園にどのように影響したか、という点についてである。今後、日本における子ども中心主義の幼児教育の実態史を明らかにしていくことが必要となるであろう。第四に、戦時下で展開された米国における日系人収容所での幼児教育の実態、その教育交流を推進した女性宣教師らの活動の特徴、及び女性宣教師の教育観や人間観が日本人に与えた影響について考察することである。これらはいずれも日本の教育史とキリスト教史、日米教育交流史を結ぶことに繋がる、キリスト教保育の実践史の大きな課題として残されている。引き続き、取り組みたいと考えている。

学位論文審査報告書

2020年8月4日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学専攻

氏名 熊田 凡子

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

「保育実態史から見た日本におけるキリスト教保育思想の展開

—立花富、南信子及びアイリン・ライザーの活動を中心に—」

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ○合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・○学術）

4 学位論文審査委員

委員長 志村 恵 (印)

委員 石黒盛久

委員 高橋涼子

委員 黒田 智

委員 滝口圭子

委員 鳥居和代

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本におけるキリスト教幼児教育（主にプロテスタント）の思想、特に教育観や子ども観の展開を、日本を代表とするキリスト教保育者であった南信子と立花富、および彼女たちと関係のあった女性宣教師（特にアイリン・ライザー）たちが残した一次史料、特に保育実践の記録から通史的に明らかにすることを目指したものである。同時に、これらのキリスト教幼児教育の実践が、日本の幼児教育一般にいかなる影響を与えたのか、あるいはいかなる貢献を果たしたのかを明らかにすることを目的とした。そしてさらに、彼女たちが残した幼稚園記念帖や保育日誌、保護者宛の便り、年次報告書等の一次史料の史料的価値についても検討したものである。

序章では、論者のキリスト教保育への関心と問題の所在を明らかにした後、日本のプロテスタント教会史、キリスト教保育史、女性宣教師の個人史および思想およびキリスト教教育論・保育論に関する先行研究を丁寧に検討し、本論文の研究史上の位置づけと、保育の実態史を取り上げる意義と本論文の扱う一次史料の史料的価値の確認を行っている。

第1章「日本の幼児教育の源流におけるキリスト教教育の役割」では、日本における幼児教育の源流と女性宣教師の関係について、実証的に取り上げている。論者によると、日本の幼児教育の起源は、キリスト教女性宣教師の宗教的・教育的営みに遡ることが確認できるという。中でも特に、「アメリカン・ミッション・ホーム」（1871年）の女性宣教師プライン、ピアソン、クロズビーらによる養育・教育実践の影響は大きく、その影響は官立幼稚園とキリスト主義幼稚園の両者に共通していたとする。

第2章「女性宣教師のキリスト教教育観—児童中心主義教育の導入と展開—」では、キリス

ト教保育の草創期から発展期の中心にあった、ランバス女学院附属幼稚園のキリスト教保育の理念と実践について、実践史的に検討している。また、同時期に、北陸の英和幼稚園園長であった女性宣教師アイリン・ライザーの教育実践とその役割について、彼女が残した一次史料を基にして考察している。すなわち、ランバス女学院附属幼稚園の保育は、ゲーンズ、甲賀ふじ、マコーレ、クック、フルトン、マクドウェル、ピービーら女性宣教師たちの「飽迄児童中心主義」の視点が素地となった自由保育の先駆的な取り組みであったという。

第3章「キリスト教主義幼稚園における自由教育の発展」では、ランバス女学院附属幼稚園において、クックやピービーの教育理念がどのように実践されたのか、立花富の残した記念帖等の記録に基づいて、その自由教育観や子ども観を分析し、自由保育の成立過程を検討している。論者によれば、立花の自由教育は、教師の一方向的な教育計画に方向付けるのではなく、教師と子どもが学び合う営みであった。立花は、子どもというものが教師に一分の隙も与えないほど意欲的で自発的な存在であると捉え、子どもの作業の動機、進行、過程、結果等を綿密に観察し、子どもの興味を強く認識していた。立花は子どもの発想や製作品の背景まで記録に残すほど、子ども一人一人の内面を大事に尊重し受け止めていたとする。立花は、こうした子どもたちを「自治」的存在と捉え、子どもの育とうとする力と可能性を高く評価していたのである。さらに、立花によると、子どもたちは聖句や讃美歌を単に覚えるのではなく、自らの経験や感覚を通して、神に目を向けていた。論者によると、立花の自由教育とは子どもが抱く世界観を理解した上で、自ら感得する子どもに共感し、これを尊重することであったとする。

第4章「南信子と立花富を巡るキリスト教幼児教育観・子ども観」では、第二次世界大戦戦下における南信子と立花富のキリスト教幼児教育の実践に着目する。すなわち、戦時下におけ

る南と立花の教育実践を、『第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園』等の一次史料によって検討し、それらに描かれた戦時下におけるキリスト教幼稚園での生活や遊びの実相を明らかにしている。南の鶴町幼稚園での実践では、子どもたちの自由作業、日々の生活経験に結びつく対話、あるいは想像・創造的な遊びが展開されていた。しかし、これらの遊びにも時代の要請による戦争ごっこなど戦争の影響が反映されていた。それでも、南は子ども一人一人の内面、特に子どもと祈る時間を大事にしており、これこそが南の自由教育であったとする。また、その後の聖和幼稚園における南と立花による実践においても、国家や国体よりもあくまで子どもの一人一人を大事にし、子どもの思いや行動に共感し、それを『お便り』を通じて保護者らと共有していた。すなわち、これらの史料には戦時体制に対応せざるを得なかった中でも、子ども一人一人の内面や個性を大事にしていたことが示されていた。一方論者は、こうした戦時下における幼児教育界の動向についても、キリスト教保育連盟の動きを踏まえ言及している。論者によれば、基督教保育連盟が発出した「昭和一七年三月七日付」通達は、国民学校に準じた規則のようなものであり、キリスト教主義幼稚園は、その通達に従っていたと考えられる。ただし、幼稚園に関しては、当時、社会的要請はあったものの、国家主義体制からの直接的要求はなかった。それにもかかわらず、当時のキリスト教幼児教育界が敢えて行政官庁の意向を汲んだのは、基督教保育連盟理事長矢野貫城が、キリスト教学校全体に対して示した方針と同じことを幼児教育においても実施させようとしたためであると指摘している。

第5章「戦後の新教育とキリスト教保育の関連性」では、南信子の残した記録を中心に、戦時下から戦後にかけての聖和幼稚園でのキリスト教幼児教育の実態を明らかにしている。南の残した「保育日誌」には、子どもの思いや考えがどのように表情や行動となって表れるのか記

録されている。論者によれば、ここに子ども一人一人の個性を尊重し、自立性、社会性、創造性を養うためにあらゆる機会を捉えつつ身近な生活から具体的に教育するランバス時代からの一貫した教育思想、姿勢が表れているという。また、東洋英和幼稚園の「保育日誌」においても、子どもの一人一人の内面や育ちを尊重する教育の実践が戦後へと継続されていたことが示されているとする。他方、ライザーは、戦前から子どもや女学生一人一人を大事に受け止める姿勢を持ち続け、それを記録に残している。彼女は、戦後すぐアメリカから金沢に戻り、戦中戦後の金沢の状態を受け止め、米国教会に資金援助を促し、日本人指導者を育成させるなど、キリスト教保育者養成課程の土台を創った。このように、戦後の南信子の聖和幼稚園での実態、戦時下から戦後にかけての東洋英和幼稚園の教師らの保育観や子ども観、そして戦後のライザーの宣教教育活動の姿勢は、いずれも、戦前・戦時下・戦後へと連続し一貫したものであったことが一次史料より読み取れる。論者によると、特に、戦前、戦時下から戦後へと連続してきた聖和幼稚園でのキリスト教幼児教育の実践は、「保育要領」に示される戦後の新教育を先取りしたものとして評価されるべきもので、「保育要領」の刊行を促す役割をも果たした可能性がある。そして、そこに功刀嘉子が深く関与していたことが指摘できるとする。

最後に論者は、第 6 章（補章）「北陸地域に女性宣教師の果たした役割—キリスト教教育の影響—」において本論の補足を行った上で、結章の「キリスト教保育思想の展開と現代的意義」において全体をまとめている。

本論文は、日本を代表するキリスト教幼児教育実践者たちの教育実践の実態史を分析することで、日本におけるキリスト教幼児教育の教育観・子ども観が、明治期から大正期、昭和期（第二次世界大戦を挟む）と一貫したものであること、また子ども一人一人の個性や存在を尊重す

る自由主義的な子ども観・保育観によって、特に戦後期の幼児教育思想・施策一般に大きな影響を与えたことを示しているが、これは高く評価できる点である。また、保育者や宣教師個人に焦点を当てたり、個々の項目に収斂したりする研究の多い中、明治期から昭和期にわたる通史的な視点、すなわち保育実践に関するさまざまな一次史料を掘り起こし、そこから導き出される実態史をもとに、キリスト教幼児教育思想の歴史的展開を紐解いたことは極めて意義深い。

一方、キリスト教教育、自由主義教育等の概念に関しては一般的な用法に従ってはいるが、本論文の論旨に則したより厳密な概念規定があってもよかったと思われる。また、第二次世界大戦戦時下における翼賛政策に一部迎合した教育実践があったものの、キリスト教幼児教育の基本思想が一貫したものであったという結論に関しても、それがどの程度意識的・計画的に行われたものであったのかについては、十分な説得力をもって検討されているとは言い難い。さらに、幼児教育一般に対するキリスト教幼児教育の影響についてもさらなる検討が必要であると指摘もあった。しかし、これらの課題を差し引いても、保育実践を示すさまざまな一次史料を掘り起こし、それを駆使しつつ、日本におけるキリスト教幼児教育思想の通時的な展開、実態史を明らかにした点には高い学術的価値とオリジナリティがあり、審査委員は全会一致をもって合格と判定した。